

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12836

研究課題名(和文) フィヒテの実践哲学における「人間の尊厳」概念の体系的解釈モデルの構築

研究課題名(英文) The systematic Interpretation of the Conception "Human Dignity" in Fichte's Practical Philosophy

研究代表者

櫻井 真文 (Sakurai, Masafumi)

大阪大学・大学院人文学研究科(人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻)・特別研究員(PD)

研究者番号：20844096

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イェーナ期フィヒテの哲学の応用的部門である「自然法論」と「道徳論」の内容を検討することを通じて、フィヒテの実践哲学における「人間の尊厳」概念の体系的解釈モデルを構築することである。これにより、その自由意志論を軸としながら、全ての人に等しく「人間の尊厳」が備わるという主張を明瞭に打ち出すフィヒテの実践哲学の射程が解明された。あわせて本研究は、「人間の尊厳」を巡る現代の議論との関連で論じるものであり、グローバル社会の基盤となる新たな普遍的理性に裏打ちされた「人間の尊厳」概念を提示する研究である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、「人間の個別具体的次元からかけ離れた理性主義的な尊厳概念を展開している」、という従来のドイツ古典哲学理解に一石を投じる仕方で、フィヒテの「人間の尊厳」概念の遂行論的性格を描出した点に存する。また、フィヒテに先行するカントや同時代人のシュミートの「尊厳」理解との連関を明らかにし、フィヒテの尊厳論の独自の性格を浮き彫りにした点にも、学術的意義が認められる。さらに本研究の社会的意義は、「人間の尊厳」概念の普遍性ならびに陶冶可能性をドイツ古典哲学の枠組みで確認したこと、教育現場における理性主導的な「人間の尊厳」概念の涵養の理論的基盤を提供した点に存していると言えよう。

研究成果の概要(英文)：The research attempted to clarify Johann Gottlieb Fichte (1762-1814)'s practical philosophy in Jena period(1794-1800), explored his doctrine of human dignity that is grounded in his theory of freedom. The fundamental question is: how could man systematically interpret Fichte's conception "human dignity" in his practical philosophy? In answer to the question, the researcher firstly analyzed the structure of his conception "human dignity", secondly clarified the moral action on the basis of human dignity, thirdly determined the actual significance of his conception "human dignity". Consequently, the research presented that the human dignity is grounded in everyone's free will, and that his doctrine of human dignity is the essential part for understanding Fichte's practical philosophy as a whole.

研究分野：ドイツ古典哲学

キーワード：フィヒテ カント シュミート 尊厳 選択意志 自由 道徳教育

### 1. 研究開始当初の背景

(1) ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ(1762-1814)に先行する、カントの「尊厳」概念を巡る研究は、1980年以降、ハーバース、ロールズ、トゥーゲンドハットらを中心に多様な方法で進められてきた。近年は R. Brandt (Immanuel Kant -Was bleibt? 2010) 以降、O. Sensen (Kant on Human Dignity, 2011)や T. Hill (Virtue, Rules, and Justice, 2012)らが、新たなカント尊厳論の解釈モデルを検討していた。カント尊厳論の核心を「理性」の超越論的構造の内に指摘した上で、功利主義や徳倫理学との比較検討を通じて、カントの「尊厳」概念の有効性を新たに吟味する彼らの研究は、現代の応用倫理学にも多大な影響を与えていた。国際的にも「尊厳」概念研究は、差別撤廃ならびに異文化の垣根を超えた連帯のための基盤形成への関心の高まりを背景として、各人に平等に備わる「人間の尊厳」概念の哲学的基礎づけとその有効性の検討を、最重要テーマの1つとして認識する傾向にあった。

(2) カントの尊厳論では尊厳のア・プリオリ性の証明に力点が置かれていたのに対して、フィヒテは早くから、理性的存在者の生得的な「尊厳」と、不断の努力を通じて達成される「尊厳に基づく具体的行為」を峻別し、後者の具体的行為の成立過程の解明を、自身の実践哲学の課題として設定した。フィヒテの実践哲学では具体的行為の可能性の制約が段階的に検討された後、熟慮的決断を行う個人の「選択意志(Willkür)」に着目して、尊敬に基づく具体的行為の成立過程が究明されることになる。そこで本研究ではフィヒテの場合の「人間の尊厳」概念のア・プリオリ性の証明、「尊厳」に基づく道徳的な行為様式の解明、「尊厳」概念の現代的意義の究明を三つの軸として設定し、フィヒテ実践哲学において「人間の尊厳」概念を体系的に解釈することはいかんにして可能か、ということの研究課題の核心をなす学術的「問い」と位置づけた。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究の主要目的は、尊厳を巡る最新の哲学的議論を踏まえつつ、フィヒテ実践哲学における「人間の尊厳」概念の体系的解釈モデルを構築することである。フィヒテの「尊厳」概念の検討を通じて、尊厳が観知的な「純粋意志」の内にア・プリオリに基礎づけられること、尊厳に基づく具体的行為は各人の「努力(Streben)」を通じて初めて成立することが、明らかとなる。こうしたドイツ古典哲学における尊厳の二層構造の解明を通して、各人の尊厳の不可侵性と陶冶可能性を確保することは、教育現場への社会的波及性を備えている。特に学校現場で人権教育を行う際、本研究は各人に等しく備わる「尊厳」を尊重しつつ、個人に固有の才能を多様な社会的制約の下で十分に発揮するための、理論的基盤を提供するからである。

(2) 上記の主要目的から導き出される、本研究の副次的目的は、フィヒテの実践哲学と現代の倫理学説を比較するという従来あまり取られてこなかった手法を採用することによって、より豊かなフィヒテ哲学研究の地平を拓く点にある。本研究は、フィヒテ実践哲学の内在的解釈に留まるものではなく、現代人は自己および他者の「尊厳」をいかに尊重すべきか、という問いに対してフィヒテに沿って具体的指針を提供するものである。さらに本研究は、カント尊厳論の最新論文集である、Y. Kato (ed.), Kant's Concept of Dignity, 2020 への十分な理解を基盤にしている。そのため本研究は、フィヒテ尊厳論をカント哲学の継承という観点の下で新たに定位する試みであり、国際的なドイツ古典哲学研究の水準に鑑みても、十分な創造性を備えるものである。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究は、フィヒテの「人間の尊厳」概念の体系的解釈モデル構築のため、彼の自由意志論と「尊厳」概念との連関に着目した。そのため、まずは前期フィヒテの『人間の尊厳について(1794)』の分析を通して彼の基本的アプローチを明らかにし、その後、関連するフィヒテの講義録や K. Chr. E. Schmid の『道徳哲学試論』(1790年)などの当時の倫理学説との比較検討を行い、最終的に現代の尊厳論の文脈にフィヒテの実践哲学を位置付けることを試みた。以上の研究は、すべて文献研究を通じて遂行された。具体的な研究方法としては、当時のキリスト教神学の背景を踏まえつつ、フィヒテ実践哲学の諸概念の生成史を解明すると共に、この生成史を踏まえ、「人間の尊厳」概念に基づく行為様式の構造を「道徳的行為」という観点から浮き彫りにし、その体系的解釈モデルを析出した。

(2) 本研究では、欧米圏でのドイツ古典哲学の最新の研究成果を絶えず参照するため、研究機関の約半分はドイツのテュービンゲン大学の J. Brachtendorf 教授を訪れ定期的に意見交換を行った。また研究成果についてのフィードバックを得るため、ライプツィヒで開催された国際フィヒテ協会学会で研究発表を行い、その後の意見交換を基に作成されたドイツ語論文が、同協会発行の Fichte-Studien に査読を経て掲載された。

#### 4. 研究成果

##### (1) 「人間の尊厳」概念のア・プリオリ性の解明

まず、フィヒテ実践哲学における「人間の尊厳」概念の構造と、併せて批判期カントの自由論について解明を行った。具体的な研究の進め方としては、フィヒテの初期の講義である『人間の尊厳について』(1794年)とカントの『純粋理性批判』(1788年、第二版)を分析するという手法を採用すると共に、2021年10月以降より同志社大学のEU特別研究員としてテュービンゲン大学に研究滞在することを活かして、ドイツでの文献調査を行った。

研究の主な成果としては、フィヒテ尊厳論が人間の知性と実践の双方に基礎をもつこと、その能動的な尊厳論が近年のカント尊厳論論争を調停する視座を含むことを解明した。これに関しては、「フィヒテの『人間の尊厳について』(1794年)における能動的な尊厳論 近年のカント尊厳論論争へのポストカント的アプローチ」という研究発表を行い、これを基にしたドイツ語論文が2024年に大阪大学の紀要ならびにAcademia.eduで公開された。カントの著作に関しては、人間の選択意志は経験的にして超越論的であるという二重構造をもつこと、その行為の最終的な規定根拠は各人に備わる道徳法則の下での自由な「決意」である、という解釈が提示された。これに関しても研究発表を行い、「批判期カントにおける選択意志の二重構造」という表題の論文が、関西哲学会発行の『アルケー』に掲載された。

##### (2) 「尊厳」に基づく道徳的な行為様式の解明

各人が自他を尊厳ある主体として取り扱う際の鍵概念となる「選択意志」の役割に焦点を絞り、「純粋意志」及び「道徳的使命」が尊厳に基づく道徳的な行為様式の諸制約であることを解明した。具体的な研究の進め方としては、フィヒテと同時代人のSchmidの『道徳哲学試論』(1790年1版、1792年2版)の「叡知的宿命論」との関連を踏まえた上で、フィヒテにおける人間の「選択意志の自由」の意義を考究した。一連の成果については、国際フィヒテ協会大会においてDie letzte Streitphase zwischen Fichte und Schmid um 1796という表題の口頭発表を行い、これまで研究者の十分な注意が向けられてこなかった『シュミット教授により提示された体系と知識学との比較』(1796年)論文において、フィヒテがイェーナ期後期知識学の方法論を示していることが明らかにされると共に、それゆえ本著作が、新しい方法による知識学の最初の序論を形成しているという解釈が提示された。同研究成果については、Fichte-Studien(2023年)に独語論文が掲載された。

本研究成果の重要性は、「尊厳」概念の全貌をフィヒテに即して解明するためには、人間の感性的次元のみならず超感性的次元をも、超越論的方法論に即して正面から論じる必要がある点を指摘した点に、存していると言えよう。

##### (3) 「尊厳」概念の現代的意義の究明

カント尊厳論から現代の尊厳論へと至る「尊厳」概念の展開史を踏まえたうえで、フィヒテの「人間の尊厳」概念の有効性と射程を解明した。その際、カントの「尊厳」概念の現代的意義を多様な観点から検討するKant's Concept of Dignity(2020)を適宜参照し、カントの尊厳論とフィヒテの尊厳論には、特に各人の「意志の自由」を重視しているという点で、大きな親和性が見受けられることを確認した。さらにフィヒテの「尊厳」概念の現代的意義を考察する際には、D. Henrichの後期のフィヒテ研究である『この自我は多くを語る』(2019)を取り上げ、「人間の尊厳」の根拠を共同体や超人間的な神の内にも求めず、一人称的存在者の「理性実践」の内に明確に指摘した点に、フィヒテの尊厳論の哲学史的意義が存することを解明した。一連の成果については、11月に開催された日本フィヒテ協会の「共同討議」で発表を行い、フィヒテの「人間の尊厳」概念は哲学実践の新たな領野を切り拓くものであるという解釈が提示された。

##### (4) 今後の展望

本研究は期間全体を通じて、フィヒテ実践哲学において「人間の尊厳」概念を体系的に解釈することはいかにして可能か、という問いへの回答を試みてきた。具体的には、「人間の尊厳」概念のア・プリオリ性の証明、「尊厳」概念に基づく道徳的な行為様式の解明、「尊厳」概念の現代的意義の究明、に取り組む中で、フィヒテの「人間の尊厳」概念が各理性的存在者の「意志の自由」なしには成立しないものであることが究明された。すなわちフィヒテは「人間の尊厳」概念を神学的伝統や当時の世俗的理解の中で論じるのではなく、自らの「自由の体系」に基づき新たに論じ直しており、いわば「人間の尊厳」概念の彫琢を有限的存在者の実践的課題として独自に展開したのである。この点でフィヒテは、カントが自らの哲学の要石として提示した「実践的なものの優位」を単なる道徳感情論や信仰主義に還元することなく、あくまで理性の限界内で、ただし一層遂行論的性格をもつものとして継承しており、カント哲学の正当な後継者たろうとしているのである。それゆえ本研究の哲学史的意義は、フィヒテ尊厳論の卓越した実践的性格を浮き彫りにした点に認められるであろう。

ただし本研究では、フィヒテ尊厳論とカントの1790年代以降の尊厳論を比較検討することに関しては、今後の課題として残されることになった。実際カントは『判断力批判』(1790年)以降、純粋理性信仰の対象であるという留保の下で、人間を超えた超感性的次元を改めて論じてお

り、いわば「人間の尊厳」における「人間」観が拡大されていくことになる。フィヒテもまた『人間の使命』以降、人間を超えた「神的なもの(das Göttliche)」との緊張関係から「人間」を捉え直すことを試みていく。そこで今後は、後期カントの自然法論や宗教論や形而上学理論、並びに中期フィヒテの「知識学」や「歴史哲学」にまで射程を広げ、両者の尊厳論の哲学的意義を「カントの『ファイヤーアーベント講義』における「人間の尊厳」概念の体系的解釈の構築」(特別研究員奨励費)において探求していくこととする。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 櫻井真文	4. 巻 30
2. 論文標題 批判期カントにおける選択意志の二重構造	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アルケー	6. 最初と最後の頁 30-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Masafumi Sakurai	4. 巻 52
2. 論文標題 Die letzte Streitphase zwischen Fichte und Schmid um 1796	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Fichte-Studien	6. 最初と最後の頁 418-429
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/18795811-05202005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Masafumi Sakurai	4. 巻 19
2. 論文標題 Die aktivistische Theorie der Wuerde in Fichtes ueber die Wuerde des Menschen (1794) : Ein post-kantischer Ansatz zur neueren Debatte um Kants Begriff der Wuerde	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Philosophiae OSAKA	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/93974	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 ヨハネス・ブラハテンドルフ（櫻井真文 訳）	4. 巻 31
2. 論文標題 フィヒテの『あらゆる啓示の批判の試み』（1792年）における啓示宗教の思想（訳）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本フィヒテ研究	6. 最初と最後の頁 34-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 櫻井真文
2. 発表標題 Die letzte Streitphase zwischen Fichte und Schmid um 1796
3. 学会等名 XI. Kongress der Internationalen Johann Gottlieb Fichte-Gesellschaft (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 櫻井真文
2. 発表標題 Die aktivistische Theorie der Wuerde in Fichtes Wuerde des Menschen (1794)
3. 学会等名 Oberseminar: Neuere Forschungen zur Philosophiegeschichte (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 櫻井真文
2. 発表標題 フィヒテの『人間の尊厳について』（1794年）における能動的な尊厳論 近年のカント尊厳論論争へのポストカント的アプローチ
3. 学会等名 第10回大阪哲学ゼミナール（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 櫻井真文
2. 発表標題 批判期カントにおける選択意志の二重構造
3. 学会等名 関西哲学会第 74 回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 櫻井真文
2. 発表標題 ヘンリッヒの最終見解――「この自我は多くを語る」（2019年）に即して――
3. 学会等名 日本フィヒテ協会第39回大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 櫻井真文
2. 発表標題 カントの『ファイヤーアーベント自然法講義』（1784年）における戦争観、自然状態の克服過程に着目して
3. 学会等名 第15回大阪哲学ゼミナール
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関